

J-CEF NEWS

no. 13

2017 SPRING

リレーエッセイ

○ シティズンシップと生徒会活動

／小原淳一（大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程）

実践事例紹介

○ 楽しく！ 面白く！ ～シティズンシップ教育定着へ向けた「ど・あっぷ！」の活動～

／馬場政彰（NPO 法人ど・あっぷ！代表理事）

特集

○ 「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」

／荒木寿友（立命館大学大学院教職研究科准教授）

推薦図書

○ ー学生・院生に薦める5冊ー

／古田雄一（大阪国際大学短期大学部専任講師）

／斉藤仁一朗（東海大学 課程資格教育センター 教職研究室助教）

連載「ヨーロッパの動きから考える」

○ スウェーデン若者協議会に学ぶ、若者が社会に影響を与える方法

／両角達平



シティズンシップと生徒会活動

大阪市立大学大学院
文学研究科後期博士課程
小原淳一

このエッセイを読んでいる皆さんが在籍されている、あるいは卒業された学校では生徒会活動は盛んにおこなわれていましたか？ 日本で戦後直後には、「教育の民主化」のために生徒会活動が推奨されましたが、「政治」に翻弄される形で活動に制限が加えられてきたことの影響が大きく、現在一般に活動が低調であるといわれています。

私は今、大学院で研究をする立場になっていますが、以前高校で勤務をしていた時に、生徒会顧問として生徒会活動を指導していました。行事がとても活発に取り組まれていた学校で、「勉強だけではいけない」という意識が生徒・教員ともにあり、生徒たちがとても主体的に行事を企画・運営をしていました。

大学院に入り生徒会活動についてどう研究するか悩んでいた時に出会ったのが、「シティズンシップ教育」です。もともと数学の教員でしたので、「シティズンシップ教育」の視点は教員の時には全く持ち合わせていませんでした。

考えてみると自分が良かれと思って取り組んできた教育活動は、能力をつけてあげられていたのかもしれませんが、そ

れはただ社会から「便利に使われてしまうような」人を教育してきてしまったかもしれないと考えるようになりました。指導する際に注意しなければいけないのは、批判的な観点を持ち、活動することによって、社会をよりよくするというような視点を持ってもらうことではないかと今は考えています。

「シティズンシップ教育」を生徒会活動で行うことの良さは、生徒会活動がかかわる活動や課題は、生徒の身の回りに存在しているものです。単純に言えば、活動を行うことによって、行事などをより楽しめるものにすることや、活動しながらまわりの友達とのつながりを強くすることができるなどの効果を生徒自身が実感できるところです。しかし教科での取り組みに比べて考えると、教科では実際の社会に関わる事項を取り扱う際には、身近なことでも少し客観的にとらえて考えられるのですが、生徒会活動で取り扱う事項は、まさに自分自身に影響があることなので、他の人との対立が起こったり、その影響を回避しようとして、深く取り組もうとしなかったりすることがあります。

また指導をする教員にとって、学校の中で対立が起こること自体を好ましいものとはとらえにくいため、全員が納得するような、いわば無難な問題に取り組みせることにもつながってしまいそうです。

私自身もそうでしたが、そのように視野を広げて、様々な生徒の活動をサポートできる教員は、そう多くはなさそうですし、どうしても横並びの意識が強いため、とびぬけて活動をすることも難しい状態ではあると思います。

しかし、活動に取り組まないこと自体が生徒たちに、「社会を意識しないこと」を学ばせてしまっている可能性があるのではないかと思います。自分たちの代表を選ぶこと、自分自身の意見をきちんとたてて、論点を明らかにしながら討論することなどの機会を奪ってしまっているかもしれません。機会を生徒から奪うことが、その先大きな影響を与えてしまうかもしれないと考えていただき、ほんの少しでもいいから生徒会活動に取り組んでいただければと思いますし、またその助けになるようにと研究をしたいと思います。

小原淳一 (johara@eurus.dti.ne.jp)